

関西の 演奏会から

みつなかオペラ《マリア・ストウアルダ》(第19回)

兵庫県川西市文化財団の「みつなかオペラ」は、もはや「市民オペラ」の枠を超えている。指揮(牧村邦彦)、演出(井原広樹)、オーケストラ(カレッジ・オペラハウス管)をはじめ、ダブルキャストのほとんどが、関西のトップクラスの音楽陣で、毎回、意欲的な公演をみせる。今回は、日本での上演記録の少ない、ドニゼッティのオペラ・セリア《マリア・ストウアルダ》を取り上げた。まさにベルカント・オペラの代表作といえ、そのものの勝負。ダブルのA組を見たが、主役の3人、マリア(尾崎比佐子)、エリザベッタ(並河寿美)、レスター伯(松本薫平)が、いずれ劣らぬ快演。とりわけ尾崎の高音域はバッチリで、聴かせどころを見事にキメた。一方、並河は、中音域の響きがよく、互いに“敵対”する2人のソプラノが、異なるキャラクターを作りあげた。プリマ2人の中に立つテノール(松本)は、まさに至難の技術が要求されるが、危なげなくクリア。欲をいえば、苦悩などのドラマティックな表現が欲しかった。

簡素だが、音楽に比重をおいた井原演出と、指揮牧村の手ぎわのよさをほめたい。来年以降もドニゼッティを取り上げることだが、この大ききの劇場にはうってつけで、大いに期待できる。(9月19日・川西市みつなかホール)

◇ 日下部 彦彦 <